



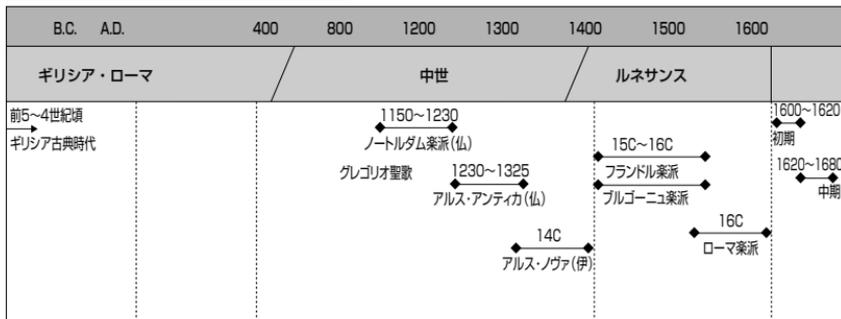
15世紀の終わり、ルネサンスの時代が到来すると、印刷技術の発達によって、教会音楽と世俗音楽の垣根がなくなり始める。そしてオペラの誕生と時を同じくして1600年、バロック時代が始まる。

### 1600年以降はよく知られた作曲家のオンパレード

バロック時代は、バッハが没する1750年までの約150年間を指し、バッハのほか、ヘンデル、ヴィヴァルディがその後期に活躍した。その後1820年頃までが、前古典派と古典派の時代。古典派は、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンという私たちにいちばん馴染みの深い3巨匠が活躍した時代である。いずれもウィーンを拠点に活動したので、ウィーン古典派とも呼ぶ。こ

の時代に交響曲の形が完成している。そして19世紀に入るとロマン派が花を開く。クラシック音楽は、文学や詩との結びつきを強め、シューベルトが歌曲の全盛時代をスタートさせる。シューマン、ブラームス、メンデルスゾーン、ショパン、リストなど数多くの有名な作曲家が出現。ロマン派は世紀の半ばで初期と後期に大きく分けられ、後期から世紀末にかけて、民族主義的な色彩が濃くなっていった。オペラの両雄ヴェルディとワーグナーを初め、チャイコフスキーやマーラー、ドビュッシー、ストラヴィンスキーなどが活躍した。そして、20世紀に入ると、クラシック音楽はそれまでのルールや構成を放棄し始め、12音音楽や電子音楽、偶然性音楽など新しい音楽の形を模索していった。

### 音楽の歴史年表



## 古代ギリシアには 音楽のオリリンピックがあった

### 音楽家は、神々の血をひいてくる??

音楽の語源はギリシア語のムシケー。全能の神ゼウスと記憶の女神ムネモシユネの間に生まれた女神ムーサに由来する。一般的には、英語読みのミュージのほうがよく知られているだろう。ミュージは文芸・音楽・舞踊を司る女神で、その数は1人、3人、7人、9人と時代によって違うが、ギリシアの古典期以降は9人と定められた。それぞれに名前があり、ローマ時代の後期には、音楽や文芸、舞踊、歴史などの受け持ち分野が決められている。

ミュージと共に音楽に関係の深い神が、ゼウスのお気に入りの息子・太陽神アポロンとはみ出し者の息子・ディオニソス（別名バッカス）。アポロンは光と真理の神であると同時に、音楽と詩の神で、キ

音楽はゼウスの息子アポロンやディオニソス、娘ミュージズと深い関係があり、少年の教育や道徳に大きな影響を及ぼすものだった。

タラと呼ばれる7弦の楽器を演奏した。一方、ディオニソスは酒と舞踏の神で、官能的に人を酔わせる力を持つ。彼の従者は、アウロスというオーボエのような縦笛を得意とする。これは、メドゥーサの首が切り落とされた時、その死を嘆き悲しんだ妹の慟哭に心を動かされた女神アテネが発明したという。

言葉にできない激情を表すアウロスは、叫びのよいうな音色で人間の心を激しく揺さぶり、人を感情的にし、道徳を破壊する危ない楽器とされていた。一方、アポロンの弾くキタラは、調和のとれた美しい音を奏で人間の心を平穏に導く。音楽は人の心や行動に良い影響も悪い影響も及ぼすことがあるとギリシア人たちは考えていたようだ。この考え方は19世紀の哲学者ニーチェによって、芸術の概念として「アポロンの」と「ディオニソスの」と呼ばれた。

## 9人のミューズの受け持ち分野

カリオペ (Kalliope)	叙事詩
ウラニア (Urania)	天文
ポリュヒュムニア (Polyhymnia)	賛歌
クレイオ (Kleio)	歴史
エウテルペ (Euterpe)	笛 (音楽)
テルプシコレ (Terpsichore)	舞楽
エラト (Erato)	歌謡
メルボメネ (Melpomene)	悲劇
タレイア (Thaleia)	喜劇

(参考:『世界大百科事典』平凡社)

ちなみに音楽はディオニソスの芸術とされた。

## スポーツと音楽は、男子の身だしなみ

スポーツの祭典オリンピックは、古代ギリシアに端を発する。同じ頃、音楽の競演会「音楽競技会」

も4年に1回行われていた。古代ギリシアの若者の理想的な姿は、スポーツができる逞しい体と音楽ができる繊細な感性を同時に兼ね備えていること。「強く勇敢ではあっても、決して無骨であってはならない。自らリラ（小型のギター）で伴奏しながら、歌を披露できるくらいでなければ」と哲学者プラトンも説いている。音楽は成長する上でその感覚や思考に良い影響を及ぼすものと考えられていたので、男の子たちは必ず音楽を学ばされた。

キタラの伴奏で歌う技術を競うことからスタートした競演会は、舞踏や拳闘が加えられ、さらには合唱や悲劇が加わり、次第に大掛かりになっていった。当時、合唱団はアマチュアの市民で構成されていたので、競演会はだんだんと、自分たちのポリスの威信をかけた音楽の戦いの様相を呈していったようだ。海外から著名な芸術家が呼び寄せられたり、歌の形式や楽器の演奏スタイルが新しく生み出される競演会を通じて、古代ギリシアの音楽や思想はヨーロッパ全土に広がっていった。

## 鍛冶屋のハンマーで音階を 発見したピタゴラス

### ハンマーの音から音律を考えたと ピタゴラス

数学の授業で習ったピタゴラスの定理を覚えているだろうか。前6世紀頃活躍したピタゴラスは数学者として有名だが、実は哲学者であり宗教家でもあった。万物の根源を「数」と考え、天文学や音楽の研究を行う一方、靈魂の不死と輪廻転生を信じ、靈魂の救いを目的とする宗教的な教団も組織している。20代でエジプトに留学し、哲学や天文学などを学んだピタゴラスは、エジプトの音楽や楽器の種類の数にも興味を示す。

「数」で音楽を説明できないかと考えていたピタゴラスはある日、鍛冶屋の前を通りかかる。何人かの職人が打ち鳴らすハンマーの音と響き。いくつものハンマーの音が重なった時、耳に心地良い響きもあ

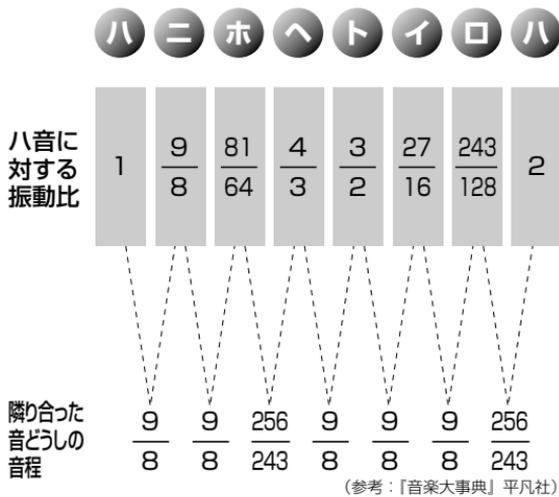
古代ギリシア時代、哲学者にとつての研究対象となった音楽は、ローマ帝国末期から中世を通じて、僧侶の必須7教科の1つになる。

れば、気色の悪い響きもある。彼は鍛冶屋の中に入って、心地良い音を響かせる4本のハンマーの重さを測ってみた。その重さの比率は12対9対8対6。この比率をもとに、自分で作った一弦琴の上で駒を動かしながらいろいろな音を出す実験を行い、ピタゴラス音律（別名ピタゴラス音階）を生み出した。音律とは、音の基準。ピタゴラス音律は弟子たちを初め、古代ギリシアを通じて研究のテーマに取り上げられ、中世の音律理論の基礎となっていく。

### 音楽は教養科目

プラトンやアリストテレスなど多くの哲学者も音楽について考察し、独自の理論を展開している。プラトンが強調したように、古代ギリシアでは音楽はスポーツとともに初等教育の二大科目。この音楽に

## ピタゴラス音律の振動比



は、詩歌などの今でいう文学や文法も含まれていた。この広い意味を持つ音楽から、文法その他の教科を分けたのはアリストテレス。彼は音楽と文章（読み書き）、体育、図画の4科を基本教科として提唱した。この「文章（読み書き）」には、文法・修辞

学・弁証法・算術・幾何・天文学が含まれていたというから、その分け方は少し強引な気もする。しかし、この教科の考え方は、その後も伝統的に引き継がれていく。そして、6世紀に活躍したローマの学者カッシオドルスが、学校教科目は7つにするべきだと主張。「智慧はその家を建て、その七つの柱を伐りだす」という旧約聖書の一節がその根拠だった。ここにローマ時代からルネサンスまでの約1000年間続く「7自由学科」の基礎ができて上がる。

7自由学科は、「文法・修辞学・弁証法（論理学）」の言語グループと「算術（算数）・幾何学・天文学（占星術）・音楽」の数学グループで構成された。前者の3科は形式科と見なされた中級科目。後者の4科は実質科と考えられ、やや上級科目。7科とも中世において教会学校の教育の中心であり、とくに後者の4科は神学への入門科目だった。僧侶の基本的教養として7学科の考え方は根強く、13世紀に大学が設立されても、自由学科は自由科学部として独立。専門学部の予備課程として存在し続けた。

## 教会と修道院の“理想の歌” 探してさまざまに聖歌が誕生

聖歌と儀式の統一でローマ復権をめざした教皇グレゴリウス。聖歌がより壮麗になるに従って、その担い手は会衆からプロの歌手へ移っていった。

### ■グレゴリオ聖歌を創ったのは教皇か？ 聖霊か？

今もカトリック教会で歌われているラテン語のグレゴリオ聖歌。男声だけで同じメロディを一斉に歌うシンブルな響きが心を和ませるのか、ここ数年人気があり、CDも多く出ている。このグレゴリオ聖歌は、「大グレゴリウス」と呼ばれて修道士たちに愛されてきた教皇グレゴリウス1世（在位590～604）が、聖霊から靈感を受けて創ったといわれている。その後も長い間、彼が編纂し体系化したと考えられてきた。しかし実際には、多くの教皇たちがその編纂に関わり、今の形ができ上がったのはグレゴリウス1世の時代よりずっと後だったようだ。編纂の中心人物は、彼より1世紀以上後に出てくる同名のグレゴリウス2世（在位715～731）だ

ったのではないか、という説もある。

グレゴリウス1世が教皇に就いた6世紀末、教会の儀式や聖歌にはさまざまなスタイルが存在していた。西にはローマ式、ミラノ式、スペイン式。東にはビザンツ式……。395年のローマ帝国の東西分裂後、西ローマ帝国は事実上崩壊し、他民族の侵入や移動が相次ぎ、経済や政治は混乱していた。いわゆる暗黒時代である。政治的統一がないため、情報が交わされることもなく、各地の教会ではそれぞれ違ったスタイルの儀式と聖歌が発達していった。

### ■聖歌は、教会の儀式に欠かせないもの

教会の儀式において、歌うことは、初期の頃から重要なパートを占めていた。式を執り行う司式者とそれをサポートする助祭や副助祭、1人あるいは数

## カロリング帝国と各地の聖歌



人のカントルと呼ばれる先唱者、教会に集まってきた会衆によって、儀式は歌を交えながら行われた。聖歌隊がそこに加えられることもあった。会衆たちはカントルや聖歌隊の歌や司式者や助祭の言葉に、

歌で応答した。音楽の指導的な役割をするのはカントルで、彼は声と手ぶりで指揮をしていたという。やがて、聖歌はシンプルなものからだんだん複雑なものになり始め、聖歌の担い手も会衆から専門的な訓練を受けた歌手たちに代わっていった。また、教会や修道院では独自の新作聖歌創りへの意欲も高まっていった。儀式をより壮麗にするため、既存の聖歌にその祝日や儀式にふさわしい歌詞を挿入したり、即興的なメロディを付加する「トロプス」という習慣も広まってきた。

聖歌は口承伝達によって代々受け継がれていた。しかし、複雑な動きを持つメロディや新しい聖歌が増えてくると、その全部を覚えて、正確に伝えていくことは困難になってくる。記憶を助ける覚え書きが必要となり、9世紀、記譜法が生まれ始めた。

# 10世紀の楽譜は オタマジャクシではなく柱の絵

## 1つの声に、もう1つ声を足してみよう

聖歌は初め1つの旋律でできていたが、デコレーションをつけて壮麗な雰囲気を出したり、旋律を自立させるために1つの旋律を2人で歌うことがあった。その時、どんなふうに歌っていたのだろうか。

作者不明の『ムシカ・エンキリアデイス（音楽提要）』という1冊の音楽入門書がある。この中にギリシア文字を変形した記号のようなもので記譜された聖歌が残されている。不思議な絵のような楽譜だ。左端に目盛りのようなものが入った柱。これが音の高さを表している。そして同じようなラインを描きながら動く2つの旋律がある。1つは主声部と呼ばれた既存の聖歌の旋律。もう1つが付加声部あるいはオルガナム（道具、オルガンの意味）声部と呼

記譜法が生まれ、譜線が生まれ、音の高さが書き記される。そして、音の長さが示されるようになると多声音楽が主流になっていった。

ばれ、主声部の下に位置している。2つの旋律の幅は5度に決められ、並行して動いている。

この本は大体900年頃、ヨーロッパ北部の修道院で記されたといわれている。これが、多声音楽が記された最古の文献だ。

## 譜線の発明者、グイード・ダレッツォ

主声部である聖歌の付加の役割をしていたオルガナムは、初めはきちんと聖歌の下に納まり、同じように動いていた。そのうち例外進行が表れてくる。主声部と違った方向に動いてみたり、主声部の上に飛び出してみたり。そうなるとう音の動きが複雑になり、旋律を覚えることがとても難しくなってくる。

その頃の聖歌教育は、口頭による繰り返しと記憶力に頼って行われていた。子どもたちに聖歌を教え

